

令和5年度 九州国際大学附属高等学校

国 語 入学試験問題

問題用紙（1～22 ページ） 試験時間（50 分）

注 意 事 項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本ではどうも、^①「演じる」ということは、「役になりきる」「のりうつる」といったイメージで捉えられがちだ。もちろんそういった憑依系タイプの俳優さんもいることはいる。だが、多くの俳優が、その内面でしている仕事は、そういったものではないだろうと私は考えている。俳優の本当の仕事は、「普段私は他人には話しかけないけれども、話しかけるとしたらどんな自分だろうか」と探ることだ。すなわち、俳優という自分の個性と、演じるべき対象の役柄の共有できる部分を捜^{さが}しだし、それを広げていくという作業が求められている。

実はこういった考え方は、教育学の世界でも注目を集めている。これを通常、「^②シンパシーからエンパシーへ」と呼ぶ。エンパシーという英語は翻訳が難しいのだが、私は「同情から共感へ」「同一性から共有性へ」と呼んでいる。

この事象のもっともわかりやすい例は、いじめのロールプレイだ。いま小中学校の総合的な学習の時間などで、いじめに関するロールプレイがよく行われている。いじめる側、いじめられる側を、^③コウゴに演じてみようという試みだ。こういった場面でも、経験の浅い教員ほど、「ほら、いじめられた子の気持ちになってごらん」と子どもたちに声をかける。だが、少し考えてもらえばわかると思うのだが、いじめられた子どもの気持ち^④がすぐにわかるのなら、おそらく、いじめはあまり起こらない。

しかし、いじめっ子の側にも、他人から何かをされて嫌だった経験はあるだろう。その二つの気持ちを、「それは似たものなんだよ」と結びつけてあげるのが、^⑤本来のロールプレイの意味あいなのだ。

シンパシーからエンパシーへ。同情から共感へ。これはいま、他の分野でも^⑥セツジツな問題となっている。

医療や福祉や教育の現場で、多くの有為^⑦の若者たちが、「患者さんの気持ち^⑧がわからない」「障害を持った人たちの気持ち^⑨が理解できない」と絶望感にうちひしがれて、この世界を去っていく。^⑩真面目な子ほど、そのような傾向が強い。

患者さんや障害者の気持ちに同一化することは難しい。同情などは、もつてのほかだ。しかし、患者の痛みを、障害者の苦しみや寂しさを、何らかの形で共有することはできるはずだ。私たち一人ひとりの中にも、それに近い痛みや苦しみがきつとあるはずだから。

こういったエンパシー型の教育には、演劇的な手法が大きな効果を示す。I 演劇はガンライ、異なるコンテクストを抱えた人間が集まって、一定期間内に何かをアウトプットする^(注3)という営みを繰り返してきたから。

⑤ ここで重要なのは、実は「一定期間内に」という点だ。

およそ、どんな共同体でも、このようなコンテクストの摺りあわせを、長い時間をかけて行う。五〇年、一〇〇年とかかって、企業や学校の中だけで通じる言葉や、その地域の中だけで通じる方言などが生まれてくる。

夫婦などはそのテンケイで、最初のうちは異なる文化、異なるコンテクストで育った二人が衝突を繰り返しながら、家の中の様々な事象に共通の名前をつけていく。II 電子レンジという家電製品は、「電子レンジ」と呼ぶ家と、「レンジ」と呼ぶ家と、そして「チン」と呼ぶ家がある。しかし、二〇年も連れ添った夫婦で、夫はそれを「チン」と呼び、妻はそれを「レンジ」と呼ぶような家は少ない。育った家での呼び名は違っても、長年一緒に暮らすうちにコンテクストの摺りあわせが起こって、共通の呼び名が固定される。

夫婦、家族のような小さな共同体でも、こういったコンテクストの摺りあわせは、ゆっくりと時間をかけて行われる。

III 演劇においては、ただかか数週間の稽古を経ただけで、あたかも家族のように、あたかも恋人同士のように、あるいはよく知っている劇団員同士でも、あたかも他人のように振る舞うことができる。

私たち演劇人は、ごく短い時間の中で、表面的ではあるかもしれないが、他者とコンテクストを摺りあわせ、イメージを共有することができる。そこに演劇の本質がある。

そして、このノウハウ、このスキルは、これからのエンパシー型の教育に大きな力を発揮するだろうと私は考えている。ここで言うエンパシーとは、「わかりあえないこと」をゼンテイに、わかりあえる部分を探っていく営みと言い換えてもいい。

(平田 オリザ 『わかりあえないことからーコミュニケーション能力とは何か』から)

(注) 1 有為—— 才能があつて将来大きい仕事をする見込みがあること。

2 コンテクスト—— 文脈、背景。

3 アウトプット—— 出力。

問一 二重傍線部①～④に相当する漢字を含むものを、次の各群のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①
コウゴ

- ア 苦手科目につまずきゴリムチュウだ。
イ ゴジ脱字の確認を何度も入念に行う。
ウ 優勝候補の選手とゴカクに戦った。
エ ゴイをさらに増やすため読書に励む。

②
セツジツ

- ア 自然のセツリに従って生きるべきだ。
イ お小遣いをセツヤクして貯金する。
ウ この問題集のカイセツは分かりやすい。
エ テキセツな判断で困難を乗り越える。

③
ガンライ

- ア 起床してすぐにセンガンする。
イ 二刀流のガンソとも言うべき人物。
ウ タイガンの火事だと油断するな。
エ 風呂場のガンコな汚れを取り除く。

④
テンケイ

- ア 水彩画の作品をテンランカイに出品する。
イ 国語ジテンを使って言葉の意味を調べる。
ウ シチテンバットウするほどの腹痛に襲われる。
エ 数学の試験で学年唯一のヒヤクテンを取る。

⑤
ゼンテイ

- ア 文化祭の企画をテイアンする。
イ カテイカの授業で調理実習をする。
ウ 教室の掃除をテイネイに行う。
エ 私のテイコウは無駄に終わった。

問二 空欄

I

II

III

 に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ なぜなら エ たとえば オ そして

問三 本文には次の一文が抜けています。どの文の前に入りますか。直後の文の最初の五字を抜き出して答えなさい。

いじめられた子どもの気持ちは、簡単にはわからない。

問四 傍線部①『演じる』ということは、『役になりきる』『のりうつる』といったイメージで捉えられがちだ」とありますが、そのイメージで捉えている場合、どのような行動を取りますか。具体的な行動が示された一文を本文から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 傍線部②「シンパシーからエンパシーへ」について本文の内容をふまえて「シンパシー」に関連のあるものを次の中から三つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同一性
- イ 共有性
- ウ 何かをされて嫌だった経験といじめられた子の気持ちを結びつける
- エ いじめられた子の気持ちになる
- オ 他人の気持ちに同一化する
- カ 他人と異なるコンテキストを摺りあわせる

問六 傍線部③「本来のロールプレイ」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と違う立場の存在を演じる中で、演技指導をする立場の者から、自分がかつて演じる対象と同じような行動を取っていなかったか探り出してもらおうこと。

イ 自分と違う立場の存在を自分に憑依させ、あたかも自分が演じる対象と同じ価値観であったかのように振る舞うことで、本来の自分に気づかせること。

ウ 自分と違う立場の存在を演じながら、自分の過去の経験を手がかりにして、演じる対象の気持ちと類似した気持ちや自分の中にも存在することを認識すること。

エ 自分と違う立場の存在をその場ですぐに演じる訓練をすることで、自己の多様性を拡張していき、どんな人間の気持ちでも把握できる力を養っていくこと。

問七 傍線部④「真面目な子ほど、そのような傾向が強い」とありますが、それはなぜですか。「他者の気持ち」「責任」「同一化」という言葉を必ず使い、解答欄に合わせて二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑤「ここで重要なのは、実は『一定期間内に』という点だ」とありますが、それが重要である理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの集団では、長い時間をかけて作られた共通認識はその後も用いられるが、演劇においては、その役柄の個性を理解し完璧に演じて、一定期間を過ぎれば別の役を演じる期間が来るから。

イ 多くの集団では、長い時間をかけてお互いの価値観を摺りあわせていくが、演劇においては、限られた練習時間の中で価値観の相違をも乗り越えて役になりきって演じることが要求されるから。

ウ 多くの集団では、長い時間をかけて個性に応じた役割が定着していくが、演劇においては、役者の個性は封印して役に没入するため個性の演じ分けに多くの時間を必要としないから。

エ 多くの集団では、長い時間をかけてお互いの共通認識を育て深めていくが、演劇においては、公演の日取りが決まっているため共通認識の醸成に多くの時間を割くことができないから。

問九 傍線部⑥「小さな共同体」とありますが、本文の内容をふまえた例として適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ある試験の受験会場に集められた受験生たち

イ 全国大会出場を目標に練習に励むチーム

ウ 中学校のバスケットボール部の保護者会

エ 長年趣味で行っているマラソンクラブ

問十 傍線部⑦「エンパシー型の教育」とありますが、その例として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの食品が廃棄されているフードロスと食糧難の問題を併せて示すことで、見過ごされがちな食べ物大切さを学習者に理解させる。

イ 自分が手伝ってもらって嬉しかった経験を思い出すことで、困っている人にどのように手を差し伸べればいいのかを学習者に考えさせる。

ウ 憧れている物語の主人公の服装や言動を真似し、正義の味方になりきるといふ体験を通して、学習者に弱者を守ろうとする正義感を持たせる。

エ 生き物を飼い日々の世話をするだけでなく、その死にも立ち会う機会を通して、学習者に命というもののかげがえのなさを深く実感させる。

問十一 次に示すのは、五人の生徒が本文を読んだ後に話し合っている場面です。本文の内容をふまえて、趣旨に最も近い発言を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A —— 長年連れ添った夫婦が同じ生活の中で似てくるのは、同じものを同じ呼び名で呼ぶことに原因があったんだね。コンテキストを摺りあわせることによって、二人の間に新たな意味合いが生まれ、そのことで共通の認識が深まっていくというのは、我が家でも思い当たることがあるよ。両親がお互いに何でも分かっているように感じるのは、エンパシーのせいだったんだ。

イ 生徒B —— 他者の気持ちに共感することは簡単ではないと分かっていたけど、ロールプレイをやることで他者を演じ、同じ気持ちになることができるというのはなるほどと思ったよ。教育の現場で盛んにいじめのロールプレイが行われ成果を上げているのも納得だね。今後は問題解決の場面で相手の気持ちになって考えてあげれば、困難な問題も容易に解決できる気がするよ。

ウ 生徒C —— そもそも、みんな違うのだから、一人一人は同じものを持ってはいないんだよ。患者さんもそれぞれ違う病気を抱え、そのつらさや悩むところは違うはずなんだ。みんな自分だけにしか分からないことを抱えて苦しんで孤独なんだよ。でもそれではあまりにも救いが無いから、限りなく困難だけど他者理解に挑戦しようとすることに価値があると、この筆者は訴えているんじゃないかな。

エ 生徒D —— そうかな。俳優という仕事をしている人たちは、自分がやったこともない職業や、自分に全く似ていない性質の人物でも、まるで本人のように演じてしまうよ。そんなスキルをテレビや映画などで目の当たりにすると、出来事の前後のコンテキストや周囲の人間の反応などを摺りあわせれば、役にシンパシーを感じることで相手の気持ちは自然と分かってくるものだと思うよ。

オ 生徒E —— 決して誰かになりきったみたいに関心の気持ちは分かるわけがないよ。相手の気持ちになるということは、相手の全てが自分と同じでないとできないことだから不可能に近いんじゃないかな。でも、全て違うということも無いだろうから、よく相手と向き合って一つでも同じ部分があれば、そこからお互いを少しずつ理解していくことは可能なんじゃないかな。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【ここまでのあらすじ】

サッカーで日本代表になることを夢見て練習に励んできた俊介^{しゅんすけ}は、所属クラブチームのメンバーに選ばれなかったことで、突然、塾（Pアカデミー）に通い、日本最難関と言われる東栄大学附属駒込中学校（東駒）を受験したいと両親に打ち明ける。懸命に頑張る俊介だが、ある日、小学校の担任や周囲の大人の言葉に心が揺らぎ、塾の前で立ちつくしてしまう。そこに講師の加地先生が通りがかり、行きつけの喫茶店に不安を抱えた俊介を連れて行き、何故^{なぜ}、東駒にこだわるのか、理由を尋ねる。

① 俊介はゆっくりと顔を上げ、口元にきゅっと力を入れる。

「生き方を変えたいからです」

長い沈黙の後、俊介がようやくそう答えると、
② 加地先生は両目を大きく見開いた。口をすぼませ、ふいのパンチを食らったような表情で俊介を見返してくる。

「なんだ俊介、おまえ、えらく大人びたことを言うな」

「ほんとのことですよ」

加地先生がコーヒーのおかわりを頼むと、一緒にプラスチックのコップに入ったオレンジジュースが運ばれてきた。おばあさんが「あたしからのサービスだよ」と俊介の前に置いてくれる。

「おまえは、いまの自分が嫌なのか？」

困ったような顔をして加地先生が聞いてくる。加地先生がこんな顔をするのは珍しい。

「はい、おれは……自分が嫌いです」

加地先生が真剣に聞いてきたので、自分も真剣に答えた。誤魔化すことも流すこともできたけれど、それはしなかった。

「そうか……。理由を聞いてもいいか」

しばらく考えた後、俊介は頷いた。急に足が震えてきたので、両手で両膝を強くつかんだまま、加地先生の顔を見る。

「おれ、妹がいるんです。いま一年生で、同じ小学校に通ってるんだけど、生まれつき耳が聴こえないんです。先生は……。先天性風疹症候群って知ってますか？」

コップに浮かぶ氷がぶつかり、カランという小さな音を立てた。オレンジジュースは美音(注1)も大好きだ。ファミレスのドリンクバーでも、オレンジジュースばかり飲んでる。

「いや、知らないな」

「赤ちゃんの病気です。妊婦さんが風疹に罹かったら、そういう病気の赤ちゃんが生まれてくることであって……。心疾患とか白内障とか……。難聴なんちやうとかが、代表的な症状で……」

(中略)

「おれが四歳の時に風疹に罹かって、それをお母さんに……」

③ うつしたんです、と言おうとして喉が詰どまった。それ以上言葉が続かず、そのうちに声を出す力がなくなった。

「俊介が風疹に罹かって、それを妊婦だったお母さんにうつした。そういうことか？ その話は誰から聞いたんだ、お父さんかお母さんがおまえに話したのか？」

俊介は俯うつむいたまま、大きく首を横に振る。お父さんとお母さんが話したわけじゃない。

(中略)

テーブルの隅に視線を落としたまま黙りこくっていると、

「おまえが入塾テストを受けた時、担当していたのはおれだったんだ。憶えてるか？」

と加地先生が聞いてきた。下を向いたまま、俊介は頷く。

「入塾テストの結果を、おれからおまえのお母さんに説明したんだ。何点だったかな？ 点数ははっきりと憶えてないけど、あんまり良くはなかったな。それでお母さんもえらく恐縮してて、これじゃあ入塾は無理ですね、って帰ろうとしてたんだ」

その話はお母さんから聞いた気がする。でも帰ろうとしたことは、知らなかった。

「おれはおまえを合格にした。合格点には達してなかったけど、そんなことは正直なところさほど関係ない。成績が伸びるかどうかは、その時点の学力よりもむしろ、子どもの性質を重要視するところがあるんだ。それでおれは、おまえなら絶対に伸びると思った。こういう仕事をしてると、時々巡り合うんだ。黙っているのに顔から、全身から、負けん気が立ちのぼっているような子に出逢う。おまえはそんなやつだった。そういう子どもには必ず、金の角が生えてくる。だからおれはおまえに、勉強を教えてみたいと思った」

知らない間に頬を伝っていた涙を手の甲で拭ってから、俊介はゆっくりと顔を上げる。

「先生はいつも……金の角^④って言うよね」

加地先生がそんなふうに見てくれていたなんて、全然知らなかった。人より遅れて塾に入った自分には、角も生えないだろうと諦めていたのだ。

「おれが合格だと伝えたら、お母さんすごく驚いてな。涙浮かべて、おまえのことを頑張り屋なんだって言ってたよ」

涙ぐむお母さんの顔が、俊介の頭の中にすぐに浮かぶ。お母さんは、俊介や美音が褒められるとすごく喜ぶ。自分が褒められているような、とても嬉しそうな顔をする。

「お母さんの言葉は嘘じゃなかったよ。四月に入塾してからこの半年間、おまえは本当によく頑張ってる。おまえの急成長は、Pアカ新宿校の講師陣の間でも話題になってるくらいだ。でも今日、おまえがどうしてこんなに頑張れるのかがわかったよ」

先生はいったん口をつぐみ、^⑥静かに息を吐き出した。

「俊介おまえ、しんどい人生だな」

先生の言葉を聞いたとたん、涙がまた溢れてきた。抑えようとして、でもどうやっても泣き声が漏れ出てしまう。先生の言ったとおりだった。これまでずっとしんどかった。でもしんどいなんてことを口にしたらいけないと思っていた。自分が弱音を口にするなんて許されないと、怯えていた。先天性風疹症候群という病気を初めて知った時。幼稚園での記憶が、その病気と結びついた時。そこからほんとに……しんどくてたまらなかった。だから頑張るしかなかったのだ。必死に頑張って、美音を守る強い兄ちゃんになって、それだけが自分のできる精一杯だと思って生きてきた。でもサッカーがだめになって、もうどうすればこれ以上頑張れるのかわからなくなった時に、東駒のことを倫太郎から聞いた。日本で一番難しい中学校に挑んで、もし合格したなら、自分を許せるかもしれないと思ったのだ。

「なあ俊介、その年でそんな大きなものを背負うなよ。……おまえの気持ちだが、おれにはわかるよ。先生にも守らなきゃならない家族がいる。でもおまえはその年で、そんな大きなものを背負う必要はない」

先生の手がテーブルの向こう側から伸びてきて、俊介の頭をそっとつかむ。

「俊介は賢い。努力もできる。ただ東駒は最難関だ。あと半年でおまえの学力が東駒レベルまで上がるかどうか、正直なところおれにもわからない。でもこの受験がおまえを少しでも楽にしてくれるなら、おれも全力で教える。応援するんじゃない。一緒に挑戦する」

俊介はテーブルの上に置いてあったおしぼりを手に取って、両目に強く押し当てた。それからおしぼりで頬を拭い、鼻水を拭い、口元を拭いてから前を向いた。目を開くと、いままで涙で歪んでいた先生の顔がはっきり見えた。

「先生は……中学受験をすることに意味があると思いますか？」

みんなに、ここまで過酷な受験勉強をさせることに納得できないの。

だって六年生の夏休みは、人生で一度きりしかないんだから。

中学受験なんてなんの意味もないって言ってたぞ。

金と時間を使って塾に通っても、合格しなかったらどうせ広陵中に行くんだ。

勉強を頑張りたいなら、中学に入ってからでも遅くないって。

頭の中にこびりついて離れなくなっていた豊田先生(注3)や智也(注4)のお父さんの言葉を、俊介はもう一度口の中で唱えてみた。俊介の胸を刺す、小さな棘とげがびっしりと付着した言葉。

「もちろんだ。じゃないと、中学受験の塾講師なんてやらないだろう？ おれは、中学受験には意味があると思ってる。人は挑むことで自分を変えることができるんだ。十二歳でそんな気持ちになれる中学受験に、意味がないわけがない」

先生はそう言って微笑ほほえむと、そろそろ塾はまに戻るぞと立ち上がった。

(藤岡 陽子『金の角持つ子どもたち』から)

(注) 1 美音——俊介の妹。

2 倫太郎——俊介の同級生。

3 豊田先生——俊介の小学校での学級担任。

4 智也のお父さん——俊介の同級生の父親。

問一 傍線部①「俊介はゆっくりと顔を上げ、口元にきゅつと力を入れる」とあるが、「俊介」についてここから読み取れることとして最も適当

なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 東駒の受験に向けた勉強から逃げ出したいと強く思った理由を、第三者である加地先生にだけは伝えようと固く決心したということ。
- イ 自分が信頼する唯一の存在である加地先生と二人で話ができる場を得たことで、これまで背負ってきた重責から解放されたということ。
- ウ これまで誰にも打ち明けなかった東駒の受験にこだわる本当の理由を、加地先生になら打ち明けても構わないと思いついたということ。
- エ 幼い頃から背負ってきた妹に対する思いを加地先生に聞いてもらいたいものの、うまく言葉が見つけれずに悩んでいるということ。

問二 傍線部②「加地先生は両目を大きく見開いた」とありますが、加地先生はなぜこのような反応をしたのですか。その理由として最も適当

なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 受験への強い気持ち語られると思っていたのに、俊介の話に意表を突かれたから。
- イ 俊介の予想外の回答にどう対応したら良いか分からず、戸惑いを覚えたから。
- ウ 俊介が抱えている悩みに対する自分の予想が当たっていて、ひどく驚いたから。
- エ 俊介の大人びた発言に半年間の成長が見えたため、思いがけず感動したから。

問三 傍線部③「うつしたんです、と言おうとして喉が詰まった。それ以上言葉が続かず、そのうちに声を出す力がなくなった」とありますが、

俊介がこのような理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誰にも話してなかったことを思い切って話そうとしたものの、必死にこらえてきた気持ちがこみ上げてきたから。
- イ 本当は言いたくないことを話すよう求められ、この瞬間まで忘れていた後ろめたい気持ちがこみ上げてきたから。
- ウ どうしようもなかったことだとはいえ、妹に迷惑をかけてしまった自分への怒りの気持ちがこみ上げてきたから。
- エ 話しているうちに先生にうまく説明できているかどうかかわからなくなり、迷いの気持ちがこみ上げてきたから。

問四 傍線部④「金の角」とありますが、どのような生徒に生えているものだと加地先生は考えていますか。本文から三十五字以内で抜き出し、

最初と最後の五字を答えなさい。

問五 傍線部⑤「今日、おまえがどうしてこんなに頑張れるのかがわかったよ」とありますが、加地先生がこのように言った理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 俊介には全身から負けん気の立ちのぼる様子が見られ、学力が他の生徒より低くても急成長の可能性がある生徒であることに気づいたから。

イ 俊介は、妹の耳が聞こえなくなった原因を自分のせいだと考えており、その妹のために最難関中学校への受験を決めたことを知ったから。

ウ 俊介には子どもが褒められると自分のことのように喜んでくれる心優しい母親がおり、温かい家庭で育てられてきたことを知ったから。

エ 俊介は、母親が言ったような頑張り屋であるだけでなく、生き方を変えたいという思いを真剣に持っている生徒であることに気づいたから。

問六 傍線部⑥「静かに息を吐き出した」とありますが、加地先生がこのような行動を取った理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 俊介を取り巻く複雑な境遇に胸が詰まり、自分まで泣いてしまいそうになったから。

イ 俊介が抱えているものの重さが伝わり、彼の気持ちを思うと胸が苦しくなったから。

ウ 「しんどい人生」という言葉を使うことで、俊介を泣かせることが分かっていたから。

エ 妹と母親との間で過ごす苦しい日々を知って、俊介の今後の生活が不安になったから。

問七 傍線部⑦「これまでずっとしんどかった。でもしんどいなんてことを口にしたらいけないと思っていた」、⑧「そこからほんとに……しんどくてたまらなかった」とありますが、「俊介」の抱える「しんどさ」を解釈したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 幼少期に患^{わづら}った自分の病が原因で妹が難聴になってしまったと知った俊介は、自ら定めた目標を達成するために努力を重ねることで、なんとか兄としての強さを示そうと苦慮してきたということ。

イ 自分が風疹に罹りさえしなければ妹は難聴にならなかったという思いに苦しめられてきた俊介は、妹の願いを自分が代わりに果たすことによって、妹の励みになれるように努力してきたということ。

ウ 幼いころに患った病が愛する妹の難聴の原因であることに気づき自暴自棄になりつつあった俊介は、ありとあらゆる難題に挑戦することで、罪の意識から逃れようともがいてきたということ。

エ サッカーでの挫折を乗り越えて中学受験合格という目標に向けて努力してきた俊介は、極めて順調に取り組んでいるように見えても、実際は妹に対する罪悪感から逃れられなかったということ。

問八 傍線部⑨「受験がおまえを少しでも楽にしてくれる」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一心不乱に努力し続けることで、妹の病気やサッカーでの挫折について悩む時間が少なくなるということ。

イ 努力を重ねて合格を勝ち取ることで、中学受験に反対している人たちを納得させられるということ。

ウ 最難関の中学校へ合格するための努力をする中で、一時的にはあるが苦しさから解放されるとのこと。

エ 最難関の中学校に合格できたとしたら、自分の悲しい過去を完全に忘れ去る手立てになるとのこと。

問九 傍線部⑩「中学受験をすることに意味があると思いますか」とありますが、加地先生が考える受験に対する意義とはどういうものですか。

その説明をしている一文を本文から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問十 この文章における表現の特徴について説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 俊介の口調を一貫して敬語で表現することで、主人公の礼儀正しい性格が強調されている。
- イ 症状名を繰り返し使用することによって、俊介が将来医療の道へ進むことを暗示している。
- ウ 多くの登場人物の視点から複数の場面を描くことで、作品の世界を重層的に表現している。
- エ 「……」を用いることで登場人物が思考している様子を表し、重々しい雰囲気を与えている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

西行法師、男なりける時、^(注1)かなしくしける女の、^I三四ばかりなりけるが、^(注2)重くわづらひて、^{II}限りなりけるころ、^(注3)院の北面のものども、弓射て遊びあへりけるにいざなはれて、心ならず^{III}ののしりくらしけるに、^(注4)郎等男の走りて、耳にものをささやきければ、心知らぬ人は、^(注5)なにも思ひいれず。西住法師、^(注5)いまだ男にて、源次兵衛尉とてありけるに、^(注5)目を見合わせて、「^(注2)このことこそすでに」^(注5)とうちいひて、人にも知らせず、さりげなく、いささかの気色もかはらでゐたりし、^(注5)ありがたき心なりとぞ、西住、のちに人に語りける。

^(注6)これらは、さまこそかはれども、みなものに耐へ忍ぶるたぐひなり。心をもてしづめぬ人は、なにごとものはなばなく、けしからぬなり。あやし^(注7)の賤の女などが、もの嘆きたる声、気色は、^(注8)隣里も苦しく、^(注9)いかでか耐へむと聞こゆれども、^(注4)一日二日などに過ぎず。のちには、さる^(注10)ありつるかどだに思はぬこそ、^(注10)あさましけれ。

『十訓抄』から

- (注)
- 1 男なりける時 —— 出家をしていなかった時。
 - 2 重くわづらひて —— 重い病気になって。
 - 3 院の北面のもの —— 院御所の北面に詰めて、警護に当たった武士。
 - 4 郎等男 —— 従者。
 - 5 兵衛尉 —— 官職名。兵衛府という武官の役所の三等官。
 - 6 これら —— 前段にもこの話と似た話があったことを、このように表現している。
 - 7 賤の女 —— 身分の低い女。
 - 8 隣里 —— 隣の家。
 - 9 いかでか耐へむ —— どうして耐えられるだろうか。

問一 二重傍線部「かはらでゐたりし」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ～Ⅲの口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ かなしくしける

- ア 悲しがつていた
イ 冷たくしていた
ウ かわいがっていた
エ つらそうにしていた

Ⅱ 限りなりけるころ

- ア 苦勞していたとき
イ 貧困であつたとき
ウ 我慢していたとき
エ 臨終りんじゆうであつたとき

Ⅲ ののしり

- ア 非難して
イ 騒ぎ立てて
ウ 評判になつて
エ ぼんやりして

問三 傍線部①「なにともしひいれず」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 西行法師の事情を知らなかったから。
- イ 従者のすることに関心がなかったから。
- ウ 弓遊びに夢中で気づかなかったから。
- エ 従者の声が小さくて聞こえなかったから。

問四 傍線部②「このことこそすでに」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家に戻る決心をしたということ。
- イ 弓の勝負の決着がついたこと。
- ウ 娘が亡くなったということ。
- エ もう日が暮れてしまったこと。

問五 傍線部③「ありがたき心なり」とありますが、どのような点を評価しているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大変な状況を知らされなくても怒らなかつた点。
- イ 大変な状況にも関わらず、武士の職務に励んだ点。
- ウ つらい出来事にも取り乱さず、静かに耐えていた点。
- エ つらい出来事に直面しても全く気にしなかつた点。

問六 傍線部④「一日二日などに過ぎず」とありますが、何が「一日二日などに過ぎ」ないのですか。本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「あさましけれ」には筆者のあきれた気持ちが表れています。筆者はどのような人に対してあきれているのですか。本文中から九字で抜き出して答えなさい。

問八 本文から読み取れる教訓として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 仲間との付き合いを重視して一緒に時を過ごし、気持ちを通わせていくことが大切である。
- イ 気持ちをかき乱されるような出来事に直面しても、我慢して平静を保つことが大切である。
- ウ 法師も武士も男も女も、身分や性別を超えて同じ里に住む者で助け合うことが大切である。
- エ つらい出来事があったとしても、気にとめないで忘れたように振る舞うことが大切である。